

会報

昭和三十二年四月より昭和三十四年三月までの史学研究会評議員は次の六一氏に決定いたしましたのでお知らせいたします。

史学研究会評議員（敬称略、五十音順）

会田 雄次（京都大）	赤松 俊秀（京都大）	田村 実造（京都大）	角田 文衛（大阪市立大）
有光 教一（京都大）	石田 一良（同志社大）	豊田 堯（京都大）	中原与茂九郎（京都大）
石田龍次郎（一橋大）	井上 智勇（京都大）	長広 敏雄（京都大）	奈良本辰也（立命館大）
内田 吟風（神戸大）	織田 武雄（京都大）	西井 克巳（金沢大）	西村 睦男（京都大）
小畑 龍雄（山口大）	貝塚 茂樹（京都大）	野上 俊静（大谷大）	野間 三郎（立命館大）
帷子 二郎（奈良女子大）	木内 信蔵（東京大）	羽田 明（京都大）	原 弘二郎（関西大）
小葉田 淳（京都大）	小林 行雄（京都大）	原 随園（京都大）	林 健太郎（東京大）
小牧 実繁（滋賀大）	佐伯 富（京都大）	林屋辰三郎（立命館大）	福尾猛市郎（広島大）
酒井 三郎（熊本大）	坂本 太郎（東京大）	藤 直幹（大阪大）	藤井 駿（岡山大）
定金右源二（早稲田大）	佐藤 長（京都大）	藤岡謙二郎（京都大）	前川貞次郎（京都大）
柴田 実（京都大）	末永 雅雄（関西大）	前田 一良（立命館大）	松井 武敏（名古屋大）
澄田 正一（名古屋大）	曾我部静雄（東北大）	松本 信広（慶応大）	三品 彰英（同志社大）
高瀬 重雄（富山大）	竹内 理三（九州大）	水川 温二（名古屋大）	水野 清一（京都大）
		宮崎 市定（京都大）	宮崎 円遵（龍谷大）
		村田数之亮（大阪大）	村松 繁樹（大阪市立大）
		森 鹿三（京都大）	山崎 宏（東京教育大）
		山本 達郎（東京大）	横田 健一（関西大）
		米倉 二郎（広島大）	以上六一名

学界消息

史学研究會關係

本會前評議員京都大學名譽教授梅原未治博士は會則第二章第八條の規定により本會名譽會員に推薦された。

例会 十二月一日(土) 午後一時

京大史学科第二教室

明代中期の北方政策

ホルスの諸像

近時出土の中國古銅器について

國史關係

読史會十二月例会 十二月八日(土)

午後一時 於京大陳列館演習室

新羅の身分制度

美濃における近世村落の形成

読史會一月例会 一月二六日(土)

午後一時 於京大陳列館演習室

律令制度下の土地所有權について

中間地帯における領主制

東洋史關係

東洋史談話會特別例会 一月二十三日(水)

午後一時 文學部第二教室

インド並びに中東地方の旅より

東洋史旧制大学院研究発表會

一月十二日(土)

午後二時 東洋史研究室

均田制と租庸調

康熙・乾隆時代の諸問題

明代北直隸の馬政

西洋史關係

原隨園先生最終講義は一月二十四日文學部

第一教室において「正義と力——ギリシヤ

政治思想と現代」なる題下に行われた。聴

講者は講堂にあふれ、大家の最後を飾るに

ふさわしい盛儀であつた。内容は古代を説

きつつ現代に及び、併せて歴史家の態度に

も触れた豊かなものであつた。なお講義終

了後、樂友會館において同僚諸教授並びに

地理學關係

日本地理學會一九五六年秋季大會

十月十三・十四日 東北大學

人文地理學の主な発表は左記の通り。

〔災害シンポジウム〕

災害の地理學的研究

藤井 素介

岩塚 守公

堀井 篤

天井川の形成と低湿地の排水形態

大矢 雅彦

菊地 光秋

東京地方低地の水害と対策

藤井 素介

渡辺 操

林 正巳

〔一般研究発表〕

前期の開發としての見立新田の諸問題

菊地 利夫

國府研究の地理的意義と課題

フレインカの鍍口壺とその地理的背景

宮川 善造

高知県寺川部落に於ける焼畑経営の構造

相馬 正胤

横手盆地周辺地域の山林所有形態について

工藤吉治郎

関東北部と岩手の蔬菜移入に於ける

兼合関係

川本 忠平

果樹経営と米作―静岡県のみかんについて

安藤万寿男

会津赤井谷地―泥炭地の構造と土地利用

吉田 義信

諏訪製糸業発達のいわゆる地理的原因

について

千葉 徳爾

駅の分布―地域構造の一断面

加賀谷 一郎

衛星都市の工業機能

山鹿 誠次

地域構造としての都市圏網

高野 史男

都市と土地利用の地域分化との機能的

関係―米沢盆地の地域構造

田辺 健一

考古学関係

唐津市周辺の調査 一月五日―二月二日

東亜考古学会の継続事業として、京都大学

水野清一教授等一行が、唐津市東宇木、同

市宇木汲田を発掘した。東宇木では、古墳

時代中期から後期にかけての横口式石室、箱式棺、地下式土壇計十三基が発見され、

珠文鏡、玉類、刀剣をえた。汲田では、八

十平方米の区域より弥生式前期末より後期

にかけての甕棺五十四基を掘り、銅剣五、

銅矛二、銅戈二、銅劍五、多鈕細文鏡一、

玉類が発見された。多鈕細文鏡が学術調査

によつて発見されたのははじめてのこと

で、豊富な銅製品の出土とともに、注目す

べき成果である。

下関市安岡町梶栗浜遺跡の調査

一月二十一日―二十九日

下関市教育委員会の委嘱により、奈良古文

化財研究所金関惣氏等が発掘をおこなつ

た。同地は大正二年に銅剣二と多鈕細文鏡

一、その後銅剣二が出土したところであ

る。発掘の結果、組合式箱式棺三、石皿一

が発見された。そのうち箱式棺二には、直

上地表に列石または敷石が設けられ、その

外側にすえた弥生式壺とともに、墓標を意

味するものとかんがえられる。同様の敷石

は他に三個所認められた。年代は土器から

弥生式前期末と推定される。

編集後記

新進村井氏の力作をはじめとして興味深い
数々の玉稿、本号も多彩な内容を盛つてお届
けすることが出来る。編者にとつてこの上も
ない喜びである。いよいよ四月には、昨秋定
められた新会則が施行される。長い伝統に輝
く本会が、更に飛躍するための衣更えである。
史料も数えて四〇巻、不惑の域に達したとで
も言うべきか。今年を史学研究会発展の重要
な翻期とするために、会員の各位の推進をお
願ひする。

(笠沙雅章)

史 林 (第四〇巻 第二号)

一九五七年 二月三日印刷
一九五七年 三月一日発行

定価 百円

発行所 史 学 研 究 会

理事長 振替京部五二五番
編輯主任 原 随園
赤松 俊秀

印刷所 中村印刷株式会社
京都市下京区七条御所内 東町三九